

沖縄語の表記をめぐる問題点

(沖縄語の文を文字通り読むと、なぜ沖縄語にならないか)

これまでの沖縄語の文を学習者が読むと、沖縄語にはなりません。その原因は、読み手が文字通り読む教育を受けていて、それに慣れきっていることと、その一方で書き手が旧仮名遣いや歴史的仮名遣いなどの言文不一致の書法で書いているためです。そのため書いた人が読めば沖縄語なのに、学習者が読むと沖縄語にならないというズレが出るのです。例えば学習者は「ないさめ」を正しく読めません。「ねさみ」と言文一致にして現代仮名遣いで書けば、読みの迷いはなくなり、問題は解決します。

(書法の原則は「一音一字」)

日本語で読み書きされる「しゃ、ぢゃ」など、日本語と同じ音は日本語と同じ書き方でよいのですが、沖縄語固有の音を、日本語の仮名を「一字二字組み合わせて書き表すのは学習者には適しません。」これまでには「ない」や「つくわ」を「一音で読ませるなど、著しい言文不一致となってしまいます。また、「田下向け」一人称を「つこやー」と書いてあるのを見かけます。「つ」などを小書きして「ついやー」「つこやー」「つこいやー」などもあり、皆同じ音のつもりで書いています。学習者は小書きがあつても文字通り「つこやー」と読みます。こういった事情は学習者を混乱させるばかりです。この種の音は沖縄文字を使って、原則「一音一字とするのが学習者に最善で、問題は解決します。「つこやー」は「やー」で済みます。

(る、 るの類)

沖縄語の「縁」(in) と「ゐる」とルビを振つてこの例を見かけますが、IJの書き方は旧仮名遣です。「ゐ」を「ゐ」と打つて出します。Iの「とかいわ」、「縁」(in) を「ゐる」と書くのは違和感があつ、文字体系にそぐいません。現代仮名遣いでは「ゐ」は'wi であるべきです。「離」は「ゐー」、「縁」は「ごん」、「上」は「あー」と書くと、他の音ともよく整似つます。また、「ゐ」は不破裂音のwe です。先賢の古文盛林やIのものに使つてこます。Iれに対する破裂音の?we は「ゐー」と書くと、他の音と整似つます。例えば、「ゐてかき (嘘)」、「わじやあー (災)」のものに書けば、瞭然に解決します。

(県条例と沖縄語の地位)

沖縄語を含めて沖縄各地の伝統言語を一括し、方言と呼ばなこど「つまへといば」ヒ語んでられを復興し、次世代に引き継いでこゝりとが、二〇〇六（平成十八）年沖縄県の条例として定められました。これまで標準語（共通語）の異形と思われてきた沖縄語等が、県条例によつて方言とは呼ばず、地方の正統な言語として公認されたことは画期的なのです。本研究は、県条例の趣旨に沿い、沖縄語を標準語の下に置くではなく、一つのまとまとた言語系であるとの認識のもとに進めたものです。しかしながら、県条例の趣旨の普及が十分でないため、沖縄語を標準語の下で考える人が多く、Iの「ゐ」とは沖縄語の教育表記の上で大きな障害となつています。